

がら絶壁に似たり、閭巷を過ぐること十町ばかり、貉澤を下れば溪路斜にして棧あり、村落に流れ入れたり、ひなたの和田といふ、朝日にむかふ名なるべし、一顧すれば多摩川の流れをへだてて、山々水にそばたち、石にむせぶ流の音谷にひびきて人のあらそひわたるが如し、山河すべて繁糾して、數里の間に屈曲し、岑にかくれ谷にあらはれ、さらす調布さら／＼にと詠じたる昔の歌の姿なり、山聳えては頂に露臺のあとをとゞめ、岸崩れては石に楯澤の名を残し、往古に戦場の樞要たるも、陰鬱たる叢澤となりて、僅に山がつの樵路をわかつ、露深くして草舊壘の礎を埋め、月さびしうして尾花白刃のひかりをまじへ、旌旗風にひるがへりて、松に白鷺を宿し、翠桃枝をたれて、丘に弓絃の糸をたち、利鎌いたづらに田園にくじけ、寶刀むなしく壙の中にうづめり、花鳥に時を感じずれば歌舞の榮華もまのあたりにして、月にむかしをしのべるときは錦繡にほこれる盛衰も、紅葉の色のうつろふに見えたり、殺氣長く昇平の日影に消えて、戰塵に似し雲もなく、人家軒をならべて、路に竈のにぎはひを列ね、ゆくかたゞ／＼に踏み分けし、數多の道も街となり、ありといふなる逃水も、俊成卿の比興とはなりぬ。

〔易林本節用集〔乾坤〕筑波山〕

〔書言字考節用集〔乾坤〕筑波嶺〔常州〕筑〕

〔和漢三才圖會〔常陸〕〔六十六〕筑波山〕

〔倭訓栞〔前編十六〕〕つくば 常陸筑波山は二尊を祭れりといふ○略 常陸風土記の説に筑波神社

は、木花咲耶比咩を祭ると見ゆ、筑波山に、男體山女體山あり、其頗き相隔つ十八町也、女體山の下に潮呼の鐘あり、此山より海に至る十五六里あり、然るに山に潮來などいひ傳ふ、まゝあらめなど石につけりと云也、海は鹿島を近しとす、男體山女體山の間より、みなの川流る、下に至りてさ